

鶴首城址

平安末期、陸奥平定に功績があり、源頼朝より成羽の地を恩賞せられ、当地の地頭職(後の守護)に任ぜられた河村四郎秀清が、文治 5(1189)年に築城したと伝えられる成羽町下原の鶴首城は、標高 338m 鶴首(頸)山頂にある。

本丸(一ノ壇)は東西 33m、南北 23m あり、主郭七ノ壇の大規模な連郭式山城である。

近隣の山城の中では、築城年代が最も古く、当地方きっての由緒ある古城の原形が遺っている。

戦国時代の天文 2(1533)年、星田から成羽へ進出した三村家親が、この城砦を堅固に増補構築し、当城を拠点として備中制覇をめざした。戦国大名三村一族の興亡は、『備中兵乱』として世に名高い。

永禄 4(1561)年、家親、元親父子が備中松山へ進出した後、三村親成、親宣父子が鶴首城に入城し、親成が城主となる。

永禄 9(1566)年、家親が宇喜多直家に謀殺された後、親成、親宣父子は、三村一族であるにもかかわらず離反して、宇喜多と和睦した毛利につく。そして毛利軍の先陣となって、三村一族の城を次々と攻め落として行く。(国吉城、鶴首城、楳城、荒平山城、鬼身城、松山城、常山城)

鶴首城守主三村左馬允(さまのじょう)親重は、200 余騎を随え城を守り、毛利軍と攻防戦を展開したが、力尽き、天正 3(1575)年 1 月 1 日落城する。

天正 3(1575)年、三村親成、親宣父子が再び鶴首城に入城し、城主となるが、

城の実戦価値は薄れて行く。

慶長 5(1600)年、関ヶ原合戦で徳川方に属して戦い、その功績により備中成羽で知行 7,000 石を得た岡越前守家俊が鶴首城の城主となるが、慶長 19(1614)年大阪の陣が起こると、家俊の長男が大阪城に入って徳川勢と戦ったため、大阪落城後、嫌疑を受け、家俊は切腹させられた。

元和 3(1617)年、成羽藩主となった山崎甲斐守家治が若桜より入部したが、「一国一城」制により、鶴首城は廃城となった。山崎氏は鶴首山麓に壮大な御殿を造営して住み、幕末維新を迎えた。

鶴首城址に登ろう会

